

雑草

並木 せつ子

雑草という言葉が好きである。「ひとつひとつの草には、それぞれ名まえがあり、雑草という名の草は無い」ということはわかっているが、言葉だけでなく雑草そのものが好きなのだ。「草いきれ」など雑草からしか感じとれないではないか。

それにしても雑草とはなんだろう。何冊かの辞書を繰ってみた。「自然に生える雑多な草(明鏡)」「あちこちに自然に生えているが、利用価値が無いものとして注目されることがない草(新明解)」「・・・耕作したり栽培したりする以外のいろいろな草(日本国語大辞典)」など、いろいろな書き方をされているが、大雑把にまとめれば、「自然に生えるいろいろな草」で「利用するためにわざわざ栽培されるものではない」というところだろうか。

なぜ、こんなことを考えたかという、何年か前から春になると、雑草の領分である空き地や線路わきの道端に、ヒナゲシ(ポピー)のような花が突然たくさん咲くようになったからだ。この花はどう見ても自然に生えたもので、栽培されたものではない。つまり辞書の定義では雑草なのである。それでもこれを雑草と呼ぶことに違和感があった。

あとから『形とくらしの雑草図鑑』(岩瀬徹著 全国農村教育協会 2007年)で調べたら、この花は栽培種のヒナゲシではなく、ナガミヒナゲシという別のものだった。「1960年ころの渡来とされる帰化植物。近年街なかの空き地や道ばた、畑の周りなどに目立って増えている」とのこと。あわせて雑草には帰化植物が多いということも知った。栽培種が野生化したり、野生種を栽培用に改良したりということもあるようだ。結論とし

て、あの花は雑草と呼んでよかったわけだが、私にとっては雑草とそうでないものとの境目が、かえてわかりにくくなってしまったような気がする。

ふと、甲斐信枝の『ざっそう』と『雑草のくらし』(ともに福音館書店)を思い出した。小さいころから見てきたのに名まえを知らなかった草——あたりまえすぎて誰も教えてくれなかったし、自分で知ろうとも思わなかった、たとえばメヒシバ、コニシキソウ、カラスノエンドウなど——の名を、私は大人になってから『ざっそう』で知った。

『雑草のくらし』は、畑のあとの空き地で、5年間人の手を加えずに、雑草たちの栄枯盛衰(?)を観察した絵本である。1年目は、さら地にメヒシバやエノコログサが生え夏から秋へ。2年目はオオアレチノギクが他の草をおしのけて増え続け、秋にはセイタカアワダチソウが咲き始めた。3年目はカラスノエンドウがつるをいっぱいのにばし他の草の上におおいかぶさって、秋には去年よりぐんと数を増やし大きくなったセイタカアワダチソウが。4年目、スイバの群れが咲き、その上にクズやヤブカラシがつるをのばして、他の草をのみこんでいった。空き地は草ぼうぼうだ。

そして5年目の春、草がすべてとりのぞかれると、さら地に最初に芽を出してきたのは、またメヒシバやエノコログサだった。滅ばされたかにみえた草たちは、地面の下で出番を待っていたのである。なかなか感動的な結末であった。甲斐信枝は植物の営みをこんなふうに言っている。

——春がきて、夏がきて、秋がきて、冬がくる、この、ごくあたりまえのくりかえしのなかで、ごくあたりまえに花が咲き、実がみのり、たねが残りつづける、このことに私は大きな感動を覚えます。——(『小さな生きものたちの不思議なくらし』福音館書店2009年)

(なみき せつこ)

前橋こども図書館訪問記

「前橋こども図書館」は、群馬県の県庁所在地である前橋市の、駅から車で5分足らずの市街地にあります。「前橋プラザ元気21」という市の複合施設の2階に、子育てひろばの「プレイルーム」、「親子元気ルーム」とともに開設されました。

訪ねたのは夏休みが始まって間もない、平日の午前。これから読み聞かせのイベントが始まるとあってか、小さなお子さん連れの親子が集まっていました。

カウンターの奥にある「おはなしひろば」でおはなし会が始まります。毎週読み聞かせをされているという「たこさんのおはなしや」こと田子智代さんに続き、地元の育英短期大学保育学科の学生さんたちも手遊びや読み聞かせを披露され、楽しくにぎやかなイベントとなっていました。

館内は、ワンフロアの広さでは国内の「こども図書館」で最大級というだけあり、スペースがゆったりと作られています。入り口でまず目に入るのは、郷土作家のコーナー。ガラスの陳列ケースには、地元の絵本作家野村たかあきさんの作品が並んでいました。

カウンターには、スタッフの方々の手作りというプラスチックコップの風鈴がたくさん下げられています。また、壁という壁を、ワークショップで絵本作家の荒井良二さんと市内在住の子どもたちが描いた壁画がぐるりと彩り、楽しく温もりのある雰囲気となっていました。

今年開館10周年を迎える「前橋こども図書館」。これまでの歩みと活動について、館長の布施さんと副主幹の黒柳さんにお話をうかがいました。

—開館10周年ですね。どんな10年でしたか？

前橋市立図書館（本館）の親子読書室の児童コーナー、児童サービスを充実発展させるべく、子どもの読書活動を総合的に推進するための拠点として平成19年12月8日に開館しました。

以来、子どもたちが本と出会う環境を目指

して、さまざまなイベントや取り組みを行ってきました。定期的なおはなし会や市内在住の絵本作家とのワークショップ、人形劇フェスタやぬいぐるみのおとまり会、本の福袋などです。

開館時は小さかった子ども、お兄ちゃんお姉ちゃんになって、お休みの日には戻ってきてくれます。子どもの成長と共にこども図書館も成長しているんだなあ実感する毎日です。

—ボランティアの方がたくさん関わっていらっしゃいますね。

はい、市民の参加と協働を得て図書館活動を行っており、読み聞かせなどにおいては、普段接しない世代間交流も生まれ、本と人をつなぐコミュニケーションの場となっています。市民やボランティアの方々に積極的に関わってもらうことで、施設の活性化や事業の実施に工夫がもたらされ、地域との結びつきが強まっていると思います。

例えば、地域で読み聞かせ活動をされている前橋市読み聞かせグループ連絡協議会（読み連）の事務局を当館に置き、イベントのおはなし会に合わせて読み聞かせに関する啓発・指導等を実施したり、希望のあった施設等で出前講座を開催したりしています。

さらに当館は「ブックスタート事業」にも力を入れており、市内在住の生後4ヶ月までの赤ちゃんに配布される絵本の引換券を持参された親子に向けて、読み聞かせや本についての相談など、多くのボランティアさんに協力いただいています。

—地域の学校や幼稚園、地域で活動されている市民団体などとの結びつきはいかがですか？

例えば、生涯学習支援の一環として、市民団体に対するボランティア活動の機会を提供

しています。また、中学生の職場体験における「読み聞かせ体験」や「学校フェスタリレーおはなし会」など学生とボランティアのコラボを実施するなど学校と市民団体との連携事業も行っています。



さらに、大型絵本や紙芝居等の蔵書を充実させ、市内の小中高・特別支援学校、幼稚園、保育園などに団体貸出するなど読み聞かせ活動を支援しています。また、小学1年生・中学1年生へブックリストの配布も行っています。

一床や書架が木で統一され、温かみのある空間です。設備はどのような工夫をされていますか？

子どもの視線を考慮して、書架の高さを4段140cmとし、絵本の書架には展示式書架を採用しました。円弧型の紙芝居棚や機関車型書架のほか、靴を脱いでくつろげるねころびコーナーや、対象者を限定したおはなし会を実施できるおはなしの部屋を2つ設置し、乳幼児から本に親しめる多彩な空間となっています。

また、車椅子やベビーカーでも館内を巡れるよう、バリアフリー・ユニバーサルデザインを採り入れました。おむつ替え用のベビーシートや貸し出し用ベビーカーも設置しています。

—「プレイルーム」や「親子元気ルーム」に隣接し、親子の楽しい居場所となっていますね。

「前橋プラザ元気21」のこの2階フロアは、「子どもは前橋の宝」をコンセプトに子育て応援施設として計画されたこども交流プラザです。施設の中でも、子どもたちの声でひと際にぎわっています。プレイルーム(親子元気ルーム)と図書館を行き来する親子が多く、おはなし会などのイベント時には、プレイルームから出てきた子どもたちに声かけするなど、本に親しむきっかけ作りにもとてもよい環境です。

—「子育て支援図書」のコーナーも充実しています。

当館の蔵書は、0～15歳の子どもとその保護者等を対象とし、その1割程度が保護者向け

の一般書です。「子育て支援図書コーナー」には、保護者や保育・教育関係者向け、読み聞かせ活動者向け、読書の仕方、子どもの病気、教育、児童文学、育児、料理などの本を並べています。

—配架で工夫されていることはありますか？

こどもの発達段階に応じて本を選ぶように、「赤ちゃん絵本コーナー」や「おすすめ絵本コーナー」、「幼年童話コーナー」などを設置しています。また、季節やイベントなどに合わせた展示も行なっています。

さらに、どんな本がどこにあるかをわかりやすくするため、書架の上にイラストの置きサインを設置しています。

—今後の展望をお聞かせください。

前橋市子ども読書活動推進計画(第二次)では、「伝えよう 本のすばらしさを」をテーマに、家庭・地域・学校・行政等全てのところで、子どもが本と出会い、主体的に本に親しめるようさまざまな取り組みを行っています。

子どもたちが主体的に本に親しむことができるための読書活動を推進し、本好きな子どもの育成に努め、自ら学び、考え、心豊かに暮らせ、また、子どもたちが楽しく読書活動に親しめるよう図書館をさらに充実させたいと思います。

「ずばり貴館ならではの自負されることは？」の質問には、八つもの活動やチャームポイントを挙げてくださり、地元の人々に支持されている自信と、図書館の運営に傾ける情熱を感じました。

前橋こども図書館は、子どもと通えるこんな図書館が身近にあったら楽しいだろうな、子育ても楽しくなるだろうなと思える図書館です。図書館という枠組みに収まらない、子育て支援や親子の居場所としての意義や可能性を追求した施設・運営としてもさらに注目したいです。(LAS探検隊)